

文京区

BUNKYO GENDER EQUALITY CENTER

男女平等センターだより PARTNER

2018

No. 89

Topics

男女共同参画で考える防災

Contents

- 【特集】関東大震災と東京連合婦人会—女性たちの救援活動— 2,3
- 文京区の避難所運営～わたしたちは何をすべきか～ 4,5
- プラスワンセミナーⅥ「男女格差 ガラスの壁と天井」 6
- 未来の女性科学者育成事業 6
- 文京区男女平等センター講演会 7
- 男女共同参画週間&文女連30周年記念講演会 8
- プラスワンセミナーⅠ「避難所で命・健康守れますか？」 9
- 夏休み親子企画 9
- 政治分野における男女共同参画推進法が公布・施行されました 10,11
- 第33回文京区男女平等センターまつり 12

2018年8月31日発行

発行/文京区女性団体連絡会 会長 岡田伴子
〒113-0033 文京区本郷4丁目8番3号
TEL.03-3814-6159 FAX.03-5689-4534

文京区男女平等センターは
文京区女性団体連絡会（文女連）が
指定管理者として管理・運営しています。

関東大震災と東京連合婦人会 — 女性たちの救援活動 —

●折井 美耶子さん（女性史研究者）

最近「災害は忘れたころ」ではなく「忘れないうちにやってくる」ようになったのではないだろうか。東日本大震災の傷跡も癒えぬうちに、熊本地震、大阪北部地震そして今回の西日本一帯の大水害である。今から約1世紀前に起こった関東大震災時に、女性たちが大同団結して救援に当たった経験から学ぶことは多いと思われる。

● 関東大震災

首都東京と近県地域を襲った関東大震災は、今から95年前の1923年9月1日午前11時58分であった。続く余震も含めてその被害は、1府9県で死者・行方不明者は10万余人、家屋の被害は37万余棟で、東京での死者の大部分は焼死で、火災は3日朝まで続いた。現在のように高層ビルはなく、また地下鉄も地下街もなかった東京である。最も悲惨だったのは本所陸軍被服廠跡地（現在横網町公園となり、復興記念館がある）と吉原遊廓（外に出られない娼妓たちは、廓内の池で死んだ）そして若い女工が大勢働いていた紡績工場などであった。被災者は、上野公園、東京駅前、皇居前広場、浅草公園などに各自小屋を建て、また救援物資によるバラックなどに入った。政府、東京府、東京市などの公的救援による炊き出し、給水、医療などのほか、赤十字社、キリスト教団体関係、帝大学生救護団、聖路加病院など民間団体が救援活動を開始した。

● ミルクの配給

国が行っていた被災乳幼児などへのミルクの配給は、9月26日に東京市社会局へ委託。市ではそのミルク配りを基督教婦人矯風会きょうふうかいく ぶしろおちみ久布白落実に依頼した。久布白はすぐ女性団体や女学校、女子大などに手紙を40通ほど書いた。第一回の会合は9月28日矯風会婦人ホームで12団体34人が参加して行われた。その席で、ミルク配りだけでなく衣類の配給や東京の復興に対して女性は何ができるかなどが話し合わせられ、女性は大同団結して行動しようと、このとき実質的に「東京連合婦人会」が誕生した。ミルク配りは、各団体が担当地区を決め、戸別訪問の際には市の調査カードに食料や衣類、布団などの生活上の不便・不足などを記載し社会局に報告した。

● 布団や衣類の縫製と配布による「二重救済」

各団体の活動報告をもちより、被災者の実態をより反映できる独自の調査カードを作成。

この調査の結果、失業した女性たちに仕事をとの意見で、内務省社会局からの資金をもとに布団の縫製を、華族同情会からの4万枚のネル襦袢の仕立てを引き受けた。これは衣類や布団の配布だけでなく、縫製した人に工賃を払う失業対策であり「二重救済」とされた。こうして本格的な寒さが来るまでには、カードに基づいて布団など公平に配布された。

● 発会式と部活動

救援活動が一段落した翌1924年1月24日、会の正式な発会式が行われ、社会部、授産部、労働部、政治部、教育部の体制で活動が行われることになった。労働部は、女性労働者の意識改革のための講座などを行い、教育部は、「父兄会」ならぬ「母姉の授業参観」などを行った。なかでも最も活躍したのが政治部で多彩な女性が集まり、焼け落ちた吉原遊廓をきっかけに公娼制度廃止を訴え、男性も含む「全国公娼廃止期成同盟会」を結成し、また婦人参政権実現のために「婦人参政権獲得期成同盟会」も発足した。

● 東京連合婦人会の活動とその教訓

会に集まって救援活動に奔走した女性たちもほとんどが被災者であり、交通などの不便ななかを献身的に奔走した。しかし残念なことに震災の公的記録にはほとんど掲載されておらず、震災の先行研究でも僅かしか触れられていない。

災害に際して犠牲になりやすく、救援にあたって最も意を注がなくてはならないのは、乳幼児・妊産婦・高齢者・障害者などである。カード調査などによるきめ細やかな救援が必要であることを今回の研究で痛感した。

2013年に行われた国連女性の地位委員会では、「自然災害におけるジェンダー平等と女性のエンパワーメント」を決議し、防災から復旧・復興まで全ての過程においてジェンダー視点をとり入れ、主流化するよう要請している。また2015年の第3回国連防災世界会議では、女性のリーダーシップ促進を掲げ、ジェンダーに配慮し意思決定への女性、若者、障害者など多様な人びとの参画を確保するよう言及している。これらが「絵に描いた餅」にならないよう期待している。



「女たちが立ち上がった
関東大震災と東京連合婦人会」
(ドメス出版)



文京区の避難所運営 ～わたしたちは何をすべきか～

●村岡 健市さん（文京区危機管理室防災課 課長）

全国で地震や大雨などの自然災害が多発している昨今、万が一のときのために私たちが日頃からしておくべきことは何なのでしょう。今回は「避難所運営も男女共同参画で」という視点から、文京区危機管理室防災課課長村岡健市さんに話をうかがいました。

インタビュアー（以下、イ）：はじめに基本的なことからうかがいます。「文京区地域防災計画」では、災害の発生直後から3時間、3時間から72時間、と時間を区切った取り組み計画を立てていますが、それはどのような理由からでしょうか。

村岡課長（以下、村）：災害発生後から3時間までの発災期には、まず区内に33ヶ所ある避難所を開設する作業を行います。発災直後は混乱しているので、避難所が有効に機能するまでには時間がかかるのですが、それが整いましたら次の段階である初動期です。この期間を72時間までとしたのは、命のタイムリミットといわれている目安が発災から72時間だからです。ですから、ここまでは特に人命救助を最優先に考え、このような計画になっています。

区では、この考えに基づいて防災計画を整えています。発災直後は、公助・自助のうちの公助はすぐには行き届かないものです。区民のみなさんは日頃から自助、つまり各自での備えを心がけるようにしてください。

イ：災害時、文京区には帰宅困難者も多いと思われそうですが、その対策についてお聞かせください。

村：基本的な役割分担としては、帰宅困難者への対応は東京都の仕事となります。

文京区で想定されている帰宅困難者は約13万2000人です。区内にある都立高校やその他

の東京都の施設を、受け入れ施設として準備していますが、文京区民の半数以上にもなるであろう帰宅困難者は、都の施設だけでは到底補えないと予想しています。そこで文京区では、ホテルをはじめとした民間企業と協定を結び、その際の受け入れ協力をお願いしています。

イ：文京区では、年に数回避難所運営訓練を行っていますが、最近の取り組みについて教えてください。

村：文京区内には区立小・中学校等に33ヶ所の避難所があり、毎年順番に避難所運営訓練を開催しています。

最近の取り組みとしましては、今年の春行った文林中学校の訓練から避難所開設キットというものを導入しました。これは、避難所運営の訓練を受けていない人でも避難所を開設できるという一式です。

各避難所には、避難所運営協議会が組織されています。本来であれば、日頃から避難所運営訓練に携わっているそのメンバーがいち早く駆けつけて開設作業に取り組むのが理想ですが、なかなかそういうわけにもいきませんし、被災されている可能性も考えられます。

ですから、一定の手順を記したものを用意しておいて、その手順に従えば誰でも避難所を開設できるというキットを導入した訓練を今年度から始めました。文京区にある33ヶ所の避難所それぞれにカスタマイズされた形で、配置をしていこうと現在取り組んでいます。

イ：避難所運営メンバーの男女比が男性に偏っていると、女性の声が汲み取られにくいという弊害が考えられますが、この問題に対して文京区ではどのような取り組みをしていますか？

村：先程もお伝えしました避難所運営協議会のメンバーは町会、学校の職員、PTA、民生・児童委員等の方々と、そこに区の職員も加わって議論をしています。その際、町会からメンバーを出してもらうときには、女性を複数出してくださいという呼び掛けをしています。

そのような呼び掛けの効果もあり、現在、区内の避難所運営協議会33ヶ所全体の男女比率は6：4くらいです。また、先ほどお話しした文林中の訓練では、男女比がほぼ5：5でした。他区の事情は把握していませんが、文京区の女性の参加率は高い方だと思います。

文林中学校の協議会でも、女性がどんどん意見を言ってくださって、私たち男性から見るとそういう視点もあるんだなと気づかされる面が多くありました。どちらが高いか低いかではなく、どちらも同等な重さがあります。さらに、障がいを持っている人や問題を抱えた人も加わると、さまざまな立場の人に配慮した避難所運営が可能になります。

イ：女性の参加が少ない地域への対策をお聞かせください。

村：まずは、先程もお話ししましたように、町会を通じて女性の参加をお願いし続けます。

また、文京区には地域防災の担い手として防災士認証登録を受けようとする者に対して、これに係る費用を助成する制度があります。受講するには町会長の推薦が必要ですが、是非女性の推薦をお願いします、と声掛けしています。

イ：防災士認証登録について、詳しくご説明ください。

村：これは、NPO法人日本防災士機構が認証する民間資格です。災害の仕組みや事前の備え

等を学び、防災訓練や災害発生時にリーダーとっていただきます。自宅学習とレポート提出、2日間の講習を経て資格取得試験に合格して得られる資格です。

現在、区内には40名弱の防災士がいますが、そのうち女性はまだ3名くらいです。理想としては男女同数になって、その方々が避難所でリーダーとなり進めていく、訓練でも中心になって采配していく、という形にしたいですね。

イ：最後に、一般区民の立場からお伺いします。避難所での困ったことや不平不満をくみ取る仕組みとして、どのような取り組みをしていますか。

村：各避難所に相談員を配置する計画を進めています。同性が対応した方が相談しやすいと考え、各所男女混合で配置できるように計画を進めています。仕組み自体は出来上がっているのですが、相談員の人選は現在進行形ですし、相談員、医師、看護師、保健師等の専門職にどのように繋げるか今後の課題です。

このような取り組みを進めることで、さまざまな立場の意見を災害対策本部で集約して対応してゆきたいと考えています。

イ：避難所を快適な空間にするためには、男性、女性、障がい者等、さまざまな立場の意見が必要であること、また、女性をもっと積極的に避難所運営に関わらなければいけないということも理解できました。本日はありがとうございました。



(防災士研修講座のご案内)

男女格差 ガラスの壁と天井

～図解で見る日本と世界の男女格差の現状と課題～

●日時：平成30年3月9日(金) 午後6時30分～8時

●講師：亀岡 秀人さん(東京新聞記者 日本ILO協議会理事)

3月9日、平成29年度のプラスワンセミナーの締めくくりとして、「男女格差 ガラスの壁と天井」について、東京新聞記者の亀岡秀人さんよりご講演をいただきました。

29年度は、「はたらく」をテーマに、多くの先生からのご講演や調査などを行ってきましたが、M字カーブ(女性の働き手が結婚・出産で中断し人数が減ることをグラフにしたもの)に象徴される、女性が働く上で何が見えない障害になっているのかについて、ひとつずつ現状をご説明いただきました。

採用時の不平等、配属先の限定、育児負担の母親への偏り、結果として昇進の遅れまで、見えない壁はどこまでも女性につきまといまいます。さらには、「男性は仕事・女性は家庭」という昔から日本にある価値観によって、最近では介護の負担までも女性が負うようになってきているとのこと。

生涯賃金の男女差は、年金格差にもダイレクトにつながってしまいます。

特にショックだったのは、そういった格差の根源は男女どちらにも、もしかしたら自分自身の中にも無意識にあるかもしれない、「固定概念」だということです。

法律にもなっていないはずの、見えない壁と天井が、我々自身の意識から生まれているという事実を改めてつきつけられ、いかに教育や啓発といった意識改革が必要かということ、改めて認識させられる内容でした。

男女を平等に扱うべき法律などもはや必要ではない、といえる平等な世の中に一歩でも近づけるよう、今後も活動を続けていこうと改めて気づかされたご講演でした。



(大内悦子)

未来の女性科学者育成事業

未来はリケジョがつくる 女子中学生をががくの世界にご案内

●日時：平成30年3月25日(日) 午前10時～12時

●講師：森 義仁さん(お茶の水女子大学理学部教授)

●実験・企画：お茶の水女子大学環境科学倶楽部

「リケジョ」とは、「理系女子」を略したもので、理系の進路を目指す女子学生や理系分野で活躍する女性社員のこと。そんな言葉が生まれた背景には、理系に「女性が少ない」という現実がありました。

なかでも女子学生が少ないのが、「電気」の分野と言われています。「中高生になって、突然、理科が苦手になる生徒が多くいます。特に“電気”がつまずきのきっかけになることが多い」と言う、お茶の水女子大学理学部教授の森義仁さん。電気分野は、電力や電機メーカーに限らず、自動車、IT、通信など、幅広く門戸が開かれているのにもったいないということで、今回のテーマは「マイクロ波」。森さんが「マイクロ波は、電子レンジや携帯電話などに使われるごく身近なもの」という説明を行った後で、電子レンジを使ったいくつかの「実験」や「アクセサリー作り」を行いました。



後半は、女子中学生たちと社会で活躍するリケジョの先輩や現役女子大生を交えて、おしゃべり会に。「理科は好きだけど、成績が伸びない」という中学生のお悩みに、「楽しいと思った気持ちを大事にして勉強を続けていくことが大切」など、先輩からアドバイスがある一幕も。参加した女子中学生たちからは、「理系をより身近なものに感じた」、「医者以外の進路が分かった」などの感想が寄せられました。

(工藤玲子)

小説「あん」に託した生きることの意味 ～誰にも生まれてきた意味がある～



●日時：平成30年3月18日(日) 午後2時～4時

●講師：ドリアン 助川さん (作家・朗読家)

今回の講演会は、カンヌ国際映画祭で大好評を博した「あん」の原作者であるドリアン助川さんをお迎えして、この作品が生み出されるまでの経緯や伝えたかったメッセージ等話をいただきました。

この小説は、書こうと思ってから実際映画になるまですいぶん時間がかかりました。私の人生のある部分を語らないとどうして書こうと思ったかを説明できないので、まずは、自己紹介代わりに学生時代以降どんなふうに進んで来たのかということをお話させていただきます。

大学では劇団を主宰していましたので、卒業後は映画の制作会社等に入って、エンターテインメントをやりたいと思っていました。ですが、今までハンデだと意識していなかった色弱を理由に希望した会社すべてから門前払いされ、卒業後は塾の先生やパーティーなどをやり、結果的に20代半ばで放送作家になりました。ですが、その仕事にも疑問を感じ始めていたころに、ベルリンの壁が崩壊して世界が大きく変わり始めたのです。是非その変化を目の当たりにしたいという思いから、ラジオ局の即席特派員としてベルリン、チェコスロバキア、ルーマニアをまわり、その1年後にはカンボジアの地雷原の取材にも行きました。帰国後は、各国で感じたさまざまな思いを表現したくてパンクロックを始め、プロデビューしたのが32歳です。

その後、10代向けのラジオ番組を担当したのが、「あん」を書いた直接のきっかけです。番組のリスナーである若者たちと会う機会があり、私は彼らに「生きる意味」について質問を投げかけました。すると、その答えは10人いたら10人全員が「社会の役に立つために生まれた」でした。そのことに、私はものすごく寒い気持ちになりました。

理由は3つあります。1つめは、この質問をしたのぐらい予防法が廃止された1996年ころだったこと。病気が完治しても療養所から出ることが叶わなかった人たちに対して、社会に役に立たなければ生きる意味がないとは言えません。2つめは、仕事仲間の子どもが2歳で病死したことです。この子どもの命も、社会に役に立つ立たないの次元では語れません。3つめは、社会という言葉です。社会の価値観は時代や地域によって大きく変化します。そんな社会を全面的正義だと信じている若者に危機感を感じたのです。

これらの感情が一緒になって、ハンセン病を背景にした物語を書こうと誓いました。でも、なかなか

筆は進まず、瞬間に10年が過ぎてしまいました。そんなとき、バンド演奏した福祉施設で出会ったのが多摩全生園の方々でした。私が以前からハンセン病を背景にした小説を書きたいと思っていること、その中で人間の生きることを聞きたいことを伝えたところ、彼らは私を療養所に招待してくれて仲間にも合わせてくれました。そのおかげでようやく小説が出来上がったのです。

担当編集者の指示で何度も書き直し12回目ようやくOKが出たとき、今度は出版社の上層部から出版できないと言われました。理由は、ハンセン病を扱っているからです。この病気を題材にするということは、それほどリスクなことなのです。結果的にはポプラ社から出版させてもらい、また、紆余曲折ありましたが映画化もされて、カンヌでスタンディングオベーションが5分以上も続くことになりました。映画祭の初日上映でしたが、2週間後の審査を待たずに世界45か国での上映が決定しました。

この映画、このように世界各国で上映されましたが、世界で理解されない2つのことがあります。ひとつは、誰もあんことを知らないことです。そしてもうひとつは、多くの国では50年代から60年代にハンセン病の隔離が解かれているのに、何故この徳江という女性がこんなに孤独な思いをしなければいけないのか、その背景が全くわかりません。何を食べてるかわからないし、背景もわからない映画ですが、結果的には多くの国で見られています。

最後になりましたが、長い時間をかけて完成したこの物語で私がお伝えしたかったこと、それは、見て、聞いて、感じて生きるということです。自分が生まれる前から世界はありました。ですが、自身が認識するこの世の中は自分と一緒に生まれたんです。あなたの認識の連続が、この世のもう一つの姿です。お金持ちもそうでない人も、ハンデを背負っていてもいなくても、等しくこの世を背負っています。これだけは誰もが平等です。

私は今後も、本を書き続けるかわかりませんが、ようやく40冊目にして、これを書くことができ、そして世界の人に読んでいただいて、今大変幸せな気持ちであります。今日は2時間という長い時間ありがとうございました。(田中ひとみ)

10年介護 ～車椅子の母と過ごした奇跡の時間～

- 日時：平成30年6月17日(日) 午後2時～4時
- 講師：町 亞聖さん（フリーアナウンサー・キャスター）



誰もが他人ごとでは済まされない「介護」について、本日は10代のころからお母さま、そしてお父さまの介護をされてきた町さんに、その経験とそこから学んだ貴重な思いについて話していただきました。

本日はお時間をいただき、ありがとうございます。タイトルに「10年介護」とつけましたとおり、母の介護を10年、その後父の介護もしました。その経験の中から、私が気づいたこと学んだことをお話したいと思います。

母が倒れたのは40歳という若さで、私が高校3年生のときでした。くも膜下出血という病気で、眼に見える症状は手術室に入るまで全くありませんでした。先生からは必ず重い障がいが残ると聞かされていましたが、手術室を出た瞬間はまだ話せていて、それが私たち家族が見ている前で、どんどん母の声擦れ、右手が拘縮して内側に丸まっていった、というように身体の機能が奪われていきました。元氣な母を知っているからこそ、そんな現実を受け入れることは辛いことでした。母の障がいは右半身麻痺と言語障がいでした。知能の低下もあると言われていましたが、これは母との接し方を工夫していくうちに、こちらの言うことは100%理解できていて母に知能の低下がないことは実感できました。

よくお話しさせていただくのですが、障がい者や認知症になると何もできなくなる、と周囲が決めてしまうことがすごく多い気がします。このような思い込みこそが、本人から可能性を奪うのだということを、私は母と過ごす中で自分自身痛感してきました。もし私が、母はもう車椅子の生活になってしまったから何もできないと決めつけて全てを私がやっていたら、母は本当に何もできない人になっていたかもしれません。

最初のうちは、母のできないことを数えて絶望的になっていたのですが、泣いていても元の母に戻ることはありません。ですから気持ちを切り替えて、母のできることを考えるようにしました。顔を洗う等の身の回りのことはリハビリの病院で出来ていた、私たちは家の中で母が怪我をしない工夫から始めて出来ることを広げていき、洗濯干しや食器洗

いなど、半強制的にはありますが家事のほとんどをしてもらいました。そんな試行錯誤を重ねていくうちに、私たちにとって、介護は負担ではなくとてもやりがいのあるものになっていったのです。

目的地やその経路に車椅子の母が使えるトイレがあるか下調べをして、梨狩りや蛍狩り、海にも行きました。まだバリアフリーという言葉が一般的ではなかった1990年代でしたし、インターネットも普及していませんでしたから準備は大変でしたが、楽しかった、またやりたいと母に感じてもらうことが目的の1つでした。そうすることで、母に次の一步を踏み出す勇気をもってもらいたかったのです。また、車椅子の人がここに来たらどんなサポートが必要なのか施設の人に考えてもらう、そんな一石を投じる思いもありました。

そんな母との生活が何十年も続くと思っていたのですが、介護生活が8年半を過ぎたころ、母は下半身から大出血して救急搬送されました。子宮がんがかなり進行していたのです。障がいはありましたが、母は私たち家族の意識の中では元氣になっていたのです、その母ががんで余命半年と告げられた現実に、みんな愕然としました。結局、治療の効果あってか、それから約1年半母は生きました。今思えばあっといふ間の10年でした。母は障がいがあっても不治の病でも、周囲に感謝を忘れない、弱音を吐かない強い人でした。私に「最期まで生きる」ということを見せてくれました。

最後に、私の好きな言葉をお伝えします。「すべてのことには時がある」これは旧約聖書に出て来る言葉です。私が18歳のとき母が倒れて介護に直面したこと、40歳で会社を辞めてフリーになったこと、そのすべてに意味があると、この言葉に出会ってから思います。そして、辛いときこそこの言葉を思い出して自分自身を励ましています。

(田中ひとみ)

避難所で命・健康守れますか？

●日時：平成30年6月8日(金) 午後1時30分～3時30分

●講師：浅野 幸子さん(減災と男女共同参画 研修推進センター 共同代表/早稲田大学地域社会と危機管理研究所 招聘研究員)



梅雨の晴れ間、猛暑の中30名が参加。女性の視点を地域防災活動に入れることで、効果的で効率のいい地域防災体制や防災活動の普及に取り組んでいる浅野幸子さんを講師にお招きしました。

<地震が起きて私は20歳まで生きられない・・・>

関東大震災や戦争で焼け野原になった浅草で育った浅野さんは、「自分は20歳の時には地震でこの世にいない」と本気で思い込んでいたそうです。大学4年生の時に阪神・淡路大震災が起こりボランティアとして地域に入ったことがきっかけで地域防災の活動に関わり、上記のセンターを立ち上げました。災害関連死を多発させない避難所づくりや要配慮者に目を向ける地域の体制をめざして具体的なワークショップ、講演活動に奔走されています。

<災害関連死を防ぐ対策が求められている>

東日本大震災では関連死の半数が避難生活での疲労。熊本地震では、関連死は直接死の約4倍というデータが示され、「トイレ使えない、食べ物ない、病気悪化、感染症発生、子どもが泣く、余震が怖い等々の中で生き延びる自信ありますか?」と問いかけられると困難さが実感できました。日本国内では要配慮者は何らかのハンディを持つ人と位置付けられる傾向にあります。が、国際的にはジェンダーの視点で配慮する議論が進んでいます。

国の『防災基本計画』では「男女共同参画その他の多様な視点を取り入れた防災体制を確立する」と記述されています。

若手や女性の積極的人材登用がされている四日市市の先進例と国分寺市の高木町地区本部レベルでの物資配布について紹介がありました。

<実践に裏打ちされた話し方に説得力>

避難所も決して安全な場所ではなく、事件として表には出ないが関係者の聞き取り調査では性暴力が多発する傾向にあることも話されました。対策としては、女性の視点で安全を守る活動を提案し、男性とともにリーダーシップを発揮することが必要です。

参加者のひとりである町会の防災部長をされている女性からは「とても勉強になり、地域に発信していきます。」と、男性の参加者からは「あらためて避難のあり方を知ることができました。各々チームを作り責任者を決めて運営して行くことの大切さ、男女関係なく協力することの大切さを学びました。」という感想をいただきました。

当男女平等センターは二次避難所と位置付けられています。指定管理者の任務を引き受けている私たちにも責任があります。当センター前にある緊急避難所本郷小学校の見取り図を見ながらの避難所運営の訓練も大変有意義でした。また、文京区は全国に先駆けて「妊産婦・乳児救護所」を4カ所の私立大学(跡見学園女子大学、貞静学園短期大学、日本女子大学、東洋学園大学)に指定していることも心強いことです。

(岩井久江)

夏休み親子企画

パパとクッキング

●日時：平成30年8月4日(土)・5日(日) 午前10時～午後1時

●講師：古川 協子さん(料理研究家・栄養士)

献立

1. 唐芋ご飯(からいもごはん)
2. 薩摩汁(さつまじる)
3. ゴーヤチャンプルー
4. 両棒餅(ちゃんぼもち)



今年も毎年恒例の人気企画が、8月最初の休日に開催されました。午前10時を前に集まってきたお父さんと子どもたちは、エプロンと三角巾を身につけて準備万端です。

講師の古川さんが今回のために考えたメニューは、暑い夏に打ち勝つ鹿児島島の郷土料理です。さつま汁の「さつま」は鹿児島のこと、ちゃんぼ餅の「ちゃんぼ」は武士の差す2本の刀のことだという話や、輪切りや拍子切り、笹がき等、野菜の切り方にはいろいろあることを教えてもらって、いよいよ調理実習の始まりです。

普段は仕事が忙しく台所に立つことのないお父さんと、初めて包丁を手にする子どもたちが力を合わせて4品の料理に取り組みました。初対面のお友だちと譲り合いながら、牛蒡、人参、ゴーヤ、豆腐等を切り、炒め、白玉粉をこねて丸め、12時前には盛り付けまで出来上がりしました。麦味噌で作った具だくさんのさつま汁、ほ

ろ苦さを感じる大人の味のゴーヤチャンプルー等、自分が作ったから一層美味しく感じたのでしょうか。みんなきれいに食べ終わりました。

お父さんにもっと家事に関わってもらおう目的で毎年開催しているこの企画、参加者の感想をいくつかご紹介します。(田中ひとみ)

<参加者の感想>

- ◆ 父親として、家事としての料理にどう関わるか、また考えてみようと思います。
- ◆ 楽しんで作り、普段より良く食べていました。ありがとうございました。
- ◆ みんなでたべておいしかった。
- ◆ 新しい料理をおぼえられて勉強になりました。また参加したいです。

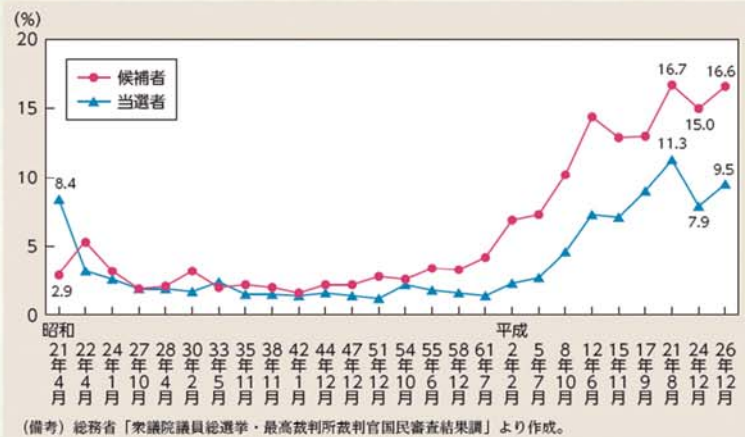
政治分野における男女共同参画推進法が 公布・施行されました

2017年11月に世界経済フォーラムが発表したジェンダーギャップ指数で、日本は144か国中114位でした。特に、前回より順位が下がった政治分野では123位となりました。

国会議員に占める女性の割合は衆議院では10.1%で、国際比較では193か国中160位（平成30年5月現在）。参議院での割合は20.7%です（平成29年1月現在）。地方議会では、女性の割合が最も高い特別区議会で26.9%、政令指定都市の市議会は17.1%、市議会全体は14.0%。全ての都道府県議会には女性議員がいますが、3割以上の町村議会は女性議員がいません（平成28年度12月末現在）。

内閣府が定める第4次男女共同参画基本計画では、男女が共同して政治に参画し、政治に多様な民意が反映されることが必要だとしています。このような中、平成30年5月23日、政治分野における男女共同参画の推進に関する法律が公布・施行されました。衆議院、参議院及び地方議会の選挙で、政党等の政治活動の自由を確保しつつ、男女の候補者数をできる限り均等にしよう政党等に求める内容です。

図 衆議院議員総選挙における候補者、当選者に占める女性の割合の推移



出典：内閣府男女共同参画局ホームページ、平成29年版男女共同参画白書

女性再就職支援セミナーと個別相談会

日時：平成30年6月4日(月) 午前10時～12時
会場：男女平等センター 研修室A
(参加：28人、個別相談参加者：9人)

※託児実施

主催：公益財団法人東京しごと財団
共催：文京区



働きたい気持ちはあっても、なかなか一歩が出ない。そんな女性をサポートするために東京都が設置した窓口、「東京しごとセンター女性しごと応援テラス」が、再就職を目指す方を対象に支援セミナーを開催しました。

セミナーでは、納得して働くために、自分のこと、社会のことを整理することが大事とお話があり、参加者は具体的な仕事探しのポイントを記入式のワークシートを使って学びました。コミュニケーション能力や性格・持ち味といったヒューマンスキルを次の仕事にどのように活かせるか考えながら、積極的に活動していくことが成功につながるお話がありました。

希望者には専門のキャリアカウンセラーによる個別相談会が行われ、家庭と仕事の両立や、就職活動での悩みなど、それぞれが抱える不安についてアドバイスを行いました。



参加者からは、「大変分かりやすく、気持ちも前向きになった」、「仕事をしていないと社会から取り残されているような気がしていたが、生きている限りキャリアを積んでいけるという言葉に励まされた」との声が寄せられました。

なくそう就職差別 ～雇用主研修会～

厚生労働省では、毎年6月を「男女雇用機会均等月間」と定めており、あらゆる企業、職場から就職差別をなくすため、飯田橋公共職業安定所、文京区及び近隣区等による共催で企業経営者を対象とした研修会が行われました。

研修会では就職機会の均等の確保や就職差別の解消について事例を交えたセミナーが行われ、参加者からは、人権問題について改めて認識できたとの声が多く寄せられました。

日時：平成30年6月11日(月)
午後1時30分～午後4時15分

会場：文京シビックホール大ホール

主催：飯田橋公共職業安定所

共催：千代田区、中央区、文京区

参加：1,170人

内容：「企業における
人権啓発の取り組み」
「公正な採用選考について」



カラーリボンフェスタ

日時：平成30年7月31日(火)・8月1日(水)
午前10時～午後7時（2日目は午後3時まで）
会場：文京シビックセンター1階 ギャラリーシビック
アウエアネス・リボンは、世界各地及び国内で、社会運動や社会問題に対して、さりげない支援や賛同の声明を出す方法として用いられています。様々なリボン運動の活動を知り、賛同・支援という行動につながるよう、11種類のリボン運動を一堂に会した展示会を行いました。

来場者は、パネルやポスター、パンフレットで各団体が取り組む活動を学んだほか、リボンのチャリティグッズを購入して活動を支援したり、ギャラリートークで直接文京区女性団体連絡会等、団体の担当者からの話を熱心に聞いていました。

またお茶の水おりがみ会館の協力によるおりがみ教室や、真砂中央図書館の協力による大型絵本読み聞かせ会といった会場イベントには幅広い年齢層の方が来場し、カラフルな折り紙で折られたリボンや、カラーリボンにちなんだ絵本を通じて理解を深めていました。



ガールズのための未来ワークショップ

男女平等センターと文京区は、女子中学生・高校生を対象とした3回シリーズの「ガールズのための未来ワークショップ～グローバルに活躍する力を身につけよう!～」を開催、7月に第1回目のワークショップを行いました。

女性の活躍推進が注目される中、若い世代へのジェンダー平等意識の浸透や、女性のエンパワーメントを推進する取り組みとして、女子中高生を対象に、各界で活躍する講師とグローバルな価値観や多様な生き方・働き方を学びます。第1回は、世界の「ガールズパワー」と日本の「女子力」の違いなどについて参加者同士が意見交換を行い、女性も男性も、自分で決めて行動するために何が必要かを話し合っていました。

参加した中高生からは、「自分も世界で認められていきたいので良い経験になった」、「これから女性がどのように社会に参加していくか、もっと勉強してみたい」等と、将来に対して前向きな意見が多く寄せられました。

日時：7月22日(日)、8月26日(日)、9月30日(日)
午後1時30分～4時30分
会場：男女平等センター 研修室B

子育てフェスティバルへの出展

区内の子育てに関する情報が盛りだくさんの、区最大の子育てイベント「子育てフェスティバル」が開催されます。

保育園の取り組みや両立支援についての展示のほか、女性の再就職相談会を行います。相談会場内には、ビデオ上映やお子さんが遊べるコーナーも用意していますので、お気軽にお越し下さい。

子育てフェスティバル2018

文京シビックワンダーランド～1日まるごとあそぼう～
日時：9月2日(日) 午前9時30分から午後4時まで
会場：文京シビックセンター

【女性の再就職に向けての相談会】

「ママが働くってどう？」

モヤモヤ解消ちょこっと相談

時間：午前10時30分～午後3時

(おひとり20分、当日予約制)

(受付 午前10時～午後2時30分)

会場：文京シビックセンター5階 区民会議室C

(保育園入園相談出張コーナーと同じ会場です)

【保育園の取り組みや、両立支援についての展示】

時間：午前9時30分から午後4時まで

会場：文京シビックセンター1階 アートサロン

文京SOGIにじいろ映画会

日時：8月6日(月)

昼の部 午後1時30分から5時まで

夜の部 午後6時30分から8時40分まで

会場：文京シビックホール小ホール

昨年公開され、多様な家族のかたちを描き大変話題となった『彼らが本気で編むときは、』を上映する映画会を行いました。昼の部の上映後、トランスジェンダーで株式会社G-pit net works 代表取締役社長の井上健斗さんと、株式会社アウト・ジャパン執行役員の屋成和昭さんを迎えトークライブを開催し、映画の説明や井上さんの経験談を伺いました。これまでSOGIについて、関心のなかった人にも映画を見ていただき、多様な性や家族のかたちについて理解を深めていただきました。



SOGIとは：Sexual OrientationとGender Identityの頭文字をとったもので、「性的指向」と「性自認」を意味しています。

第33回 文京区男女平等センターまつり

入場無料

～きのう きょう あしたへ～
「次の世代へつなごう！ 男女平等」

2018年 10月27日(土)・28日(日) 開催時間 午前9時30分～午後5時

▶ 10月27日(土) 午後2時～4時

まつり講演会



あつみ なおき
* 渥美 由喜 さん
内閣府地域働き方改革
支援チーム委員
(兼務 東レ経営研究所)

「6Kライフのすすめ

～男性会社員の仕事・家事・子育て・
介護・看護・子ども会～



▶ 10月28日(日) 午後2時30分～4時30分

まつりシネマ

*「未来を花束にして」

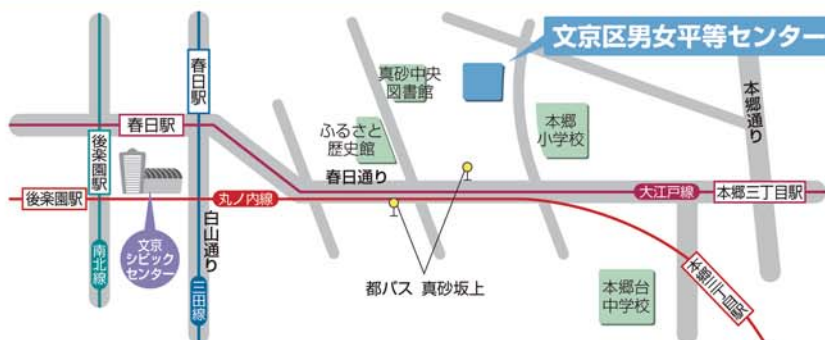
出演：キャリー・マリガン
メリル・ストリープ

運命も世界も自らの手で変えてゆく——
これは、真実に基づいた、勇気ある女性の
物語。



© Pathe Productions Limited, Channel Four Television Corporation
and The British Film Institute 2015. All rights reserved.

英語リトミックや絵本の読み聞かせ、バルーンアートなど、
親子で楽しめる企画もたくさんあります！！



- 都営バス
真砂坂上下車 徒歩3分
- 三田線
春日駅下車 徒歩7分
- 大江戸線
本郷三丁目駅下車 徒歩5分
- 丸の内線
本郷三丁目駅下車 徒歩5分
- 南北線
後楽園駅下車 徒歩10分

お問い合わせ先

文京区男女平等センター 〒113-0033 文京区本郷4-8-3
TEL. 03-3814-6159/FAX. 03-5689-4534 <http://www.bunkyo-danjo.jp/>

編集後記

男女平等という言葉が言われ始めて久しい今、本当に男女共に生きやすい社会は実現したのでしょか。今年度はそのことを考える1年にしたいと考えています。第1弾として今号は防災について特集を組みました。みなさまのご意見をお待ちしています。
(広報部：田中・塩田・高橋・新島・根尾)